KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

雲 13
694
4冊

本清

門 遠13
號 967
卷 4

嵐峽花月奇譚卷之四〇

平安　瀬川恒成著

第四回

義士北野ゐて樓娘と諭し話
壯夫舟坂よて老狼と砍る

時ハ文明元年秋八月廿五日のるまちのけふなん北野の聖廟の御縁日ありれが恭詣の貴賤老若往来しげ其中ニさい目立若侍。立派のもとり大小。これが名ハふ京都の守護職。宇羅上則宗公の郎黨。秋月桂太夫清英ハ子桂太郎清澄ハ。美男ハ世ハ

三教文堂藏

在原の中将などのゆゑ。おとゝしの容貌。歳は廿歳よ
りうまのごとくにとゝまる若ざくら。潜びやかなる顔ばせ。
深編笠の紐とくとすゝ。茶屋床几よ腰うちかけ。憩
らるゝを折ゝ。本社のうさとり下向の一群。花流とそろ
ゆる風俗。中よりぐるま武家娘。窈窕たる一人の淑女。
侍女両人召つれ。往来の見合ひ顔。世美乃小川
よりげうつゝ月うげるゝで清澄げるゝたるゝ。真さ
を。花とのごむ〜桜子も。日頃恋〜さ人ふりと。おのゝ
思ひ被然む貞と。袖でかくしてとぬ風ど。しるとゝ

目のとのしゝ。侍女等い目ちゆく精し。接子ら袖とひうへ。
つるよ娘〜先刻より。さで労きとせゆつゝん。是よる。茶屋が
抹凡るて。まるで休息せゆつゝん。いさなりるとう様ちふて
腰と想ひとりけまく。神のゆくとうれしくて。接子い
ゝ清澄と。睨目〜つ貪視かる。こ〜元どもい気と焦燥
日頃恋〜くるつゝ〜。思ひよ煩ちゆゝる。許嫁の清澄
さぬい。彼ゝる公子よむゝるゝし。ちゆゝもわしきゆゝ。
日頃疎遠ようちとゝのふ。うゝとゝるゝ。真ぬと。坤
中〜れゝ側よりゝ。喃挂太良ぬ〜清澄さぬ。奴家〜接子

ゝくゝべて。親ゝ達ゝ去歳の夏。家隷が喧嘩のまゝ
不和ゝ成りぬるゆへ。公と奴家ゝ幼稚より。許嫁ある様仕
れ中。書ゝて問つといへども。とゞむる人もなるまじと。そち
らゝて偶ゝ遭るゝものゝ顔そむけ。人でもなき身ゝ
ゆゝ。いつも強面さはこゝろや。女心ゝ果敢もなのゝ
明暮ゝおりゝ煩ゝて一日も。わるゝ間ゝなるべし。
むやく添ゝさ逢ゝさる。聖廟へ願ゝけゝ。何卒親達ゝ
ゝれば中和らぎ一日もはや。祝言さゝてゝれと。日ま
りゝてゝのゝて。其わけゝも不図遭しゝ夢ゝ現ゝ。

管公さゝれ媒妁ゝて。引合ゝしゝるべし。おや此方
向て只一言。とれゝるゝゝべ吾良人と。ゝち怨ずれで。清
澄も稍中ゝるゝとゝえゝて。吾倘ゝも岩木ゝゝよ。
今れ詞ゝ一毫ゝりも。理あゝべい思ゝるゝど。そゝる通ゝ
親ゝれ中ゝさゝ不和ゝなりゝるゝ。ゝゝゝ往返せゝふ
も。諺ゝいふ蘭れ道ぞゝ。胡越れ隔れゝるゝゝ中なゝど。
とても叶ゝるゝ赤繩ゝおもひ。吾倘ゝるゝゝ断。他家へ
嫁婚ゝゝいね。ゝゝゝ茶店れ林几ゝるゝゝ同士ハ
同林几ハ。瓜田れ履れおゝれゝれ。吾倘ハ退ゝゝゝ。

国文学研究資料館蔵

立そろぐむるこゝもとあるゝ。先まづ清澄さま。尊公さま。
男は性そろまて。何とも思ひまいらぬ。姫御前とうふものハ。
一度縁とむすびてハ。二度ゝあるまじへあり。然きがゝふ乃
娘とは。夫といふを天も地も。公より外はまゝ〇ぢ。
こがれまふも無理なゝ。親御さまと不和あらばさや
婚礼も芽出さるるん。よゝ婚姻ふさればゝ。屢〻
往返ゝまへ。あん貞るゝ。なぐさ乃ぶるも
ひゝんる。それさへ今ハこゝ。ふれバさるもなる。
菅聖廟へ願りけゝ。同ぐこの歩行まゝで。それ驗すや

今ゝでいひゝ〜ハ千早ゝる。神の結ぜ乃ゝるる。やでされ
ぬゆゝまゝべられ。瓜田の履とれのまゝべ。ぢとでよ幼稚を
ゝるゝりゝ。許嫁なる。妹と伏せ。中ゝ進られ指をさゝんや。
ゝゝゝゝ誹謗も。其いひさはの立ぐゝれるゝゝくや
ゝるまゝ。性ゝろよい深ゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ処ゝて休息
ゝひぢ娘とは性ゝろと問まゝぐさゝゝゝゝ。さで
むゝるゝの袂ゝとぐる。さゝ子ハなゝどるゝ。日下哥女
が言ヒゝぐ。貴さも卑さも女ごぜは。ぐゝゝび嫁ぐ道
いまゝ。たゝ不和なる中ゝとも。親ゝゝて妹と伏の許

宝玉堂蔵

嫁されしうへは。天にたとふる吾夫なるに。ふたゝびまた他人へ。婿嫁せよとは情なし。然しれへむのへあらずや。叶はねばこそいかなれば国の尽迄へも連往て。夫婦となるべく賜ねかし。夫も叶はぬ理義なるが。公が手よりけころしてたべと。よゝとなきつゝかきくどく。心のうちこそ哀なるなかなかにてらるゝ清澄も。流石にこゝろも立きもせず黙然と手を叉き。思ひし沈吟しかゝる處がやゝに何さる子が耳をふさぐ口をよしそ。物かげなる吾俯として。かくあまたまで不海が深切ならしむきたちまちのがるゝ。近時両家は

確執ありて。世の中おだやかならざるゆへ。主君は宮闕を守護のため。片時も在しきへ還てあらず。中にも蛇塚てんぜん我意につのりて謀反をくはだて。潜に一味の輩をすゝめひ埃塵に乗じ家国を略奪せんとその結構。原来親父も則春ぬしも。忠信無二の人なれば。かくたくらむとはしりたれども。さしそれ言にあらはさずば。隠謀のもれんを畏れて。渠が毒手に殺害せられん。かくては犬死同然なれば。主君のおんためになるとはなく。却て逆賊が威をますしむる道理なれば。こゝろざしといつはり喜びて。一味の人数に加はり。時を見合逆賊

と誅伐せんとありしのみ。外に心はあらざりし。則春どのとさすが
父は。莫逆の良友なり。よつて幼稚頃よりして。汝と吾倅と
妹と伕の言なづけはせられたり。夫は彼もよくしりつねおもふなれ
ども。邪智ふかき典膳はおそろしく影蔭を。互に喋じ合せ
にて家隷が喧嘩を幸ひに。不和となりしも計策のひとつ。
主君へ忠義のさまたげ。斯も心ならぬ内。則春どのは幸ひ
くて。去年の妹早世しのみ。吾父が力となるべき人は。鎌田
父子より外になし。其父子両人は鉄石の心にて。心をあはせ
固めなば。さしもふせぎがたけしきなれば。遂にかれが奸計に
陥りて。不慮のことも出来んかと。ひとしほ案じ思ふのみ。然
れども心裡を告ねば。彼両人はまたく父子が心をしらずして
大甚に心にくゝおもふなるべし。然はあれども父がごとく
欺きたらばよからんが。本意をとぐることかたからん。則春
どのと不和となりしも。是非のためよしあればなり。かりそめにも
かりそめにも。疎遠なりしその中と。今和睦しては
汝を娶らば。なほさら典膳がうたがひまして。災のおこらんもしらざらん。
かくてはこれまでの心をくだき。計りしこともむなしくなるべし。泡と
きえて高恩の君には不忠の臣となるべく。父母には不孝の

子ゝるべし。夫婦吾儕とおもひ断く。他家へ嫁ねといひし
あり。然まてども貞女は道とまもり。二人の夫を見しとき
いまだし心とのなべて。時のいくるとまちまち逆賊誅
伏して。国安穏に治らべそれ時ことわりなく。妹伏の睦
びあんべきなり。是ホは義理とさくまけ。こくゝ中さへ
うくるめへ。人やいきゝん日やくまん。母後室乃ものいん。
ちやくゝと理とせゝく。説さとされる女気を。おりい
佶さるさゝ子ち。今い回応ん詞まくゝより外のこと
ぞるゝ心と察しこゝりとは胡喋哥女も諸袖とゝぐり。

るゝなりゝ折ゝ向ふへ来る侍人催ふゝんとゝく
れい是則ち別人ふゝべ。清澄ゞ父清英荒牧勇馬と
同伴ゝ。忠と不忠は二ツの心りゝにハ二ツはおりひゝく。聖廟
信であんるべし。夫とゝるより清澄い。さくゝ子に且くハ
せゝ。ちくゝと忙がゝ立をバ。ぢい左ぶゝ中方ふく。
ふゝりあゝげよさくゝ子い。ゝゝ起ゝこゝりとは。こてふ
ふゝゝとめろゝぶ中ゝさとさゝてゞ立ゝる。清英勇馬
い遠間より。始終の光景えゝゝ。目下さくゝ子ゞ立ゝ
るゝ。ゝゝとは重げるぶいより夫と推ゝゝバ。おいまゝと思へ

と清英い勇馬が手まへとをぐりて。進くと清澄が。休
ひー牀几よ近づけば。是い家尊の大人よくことと。座と避
んとする衿髪つて。地上よ堂と引下し。扇とりつく下て
。桂太良と打すれば。勇馬い遽くおどろきて。物まや
つくる秋月大人。何科あり。清澄ぬーと。くくい打嚬し
ふ中。取をぐるとりて。ひさめてげふーぞ荒牧姓。目
今足下もるりよんつーん。我と不和まる則春が。ますれ
ぐきれ女と通ど。法度よ乖く不美淫奔。主人よそむき
父よそむく。不忠不孝の世児が行状。ふりくきーく

ーく夫ひへふ此折撼切判んでるもとたーねど。ふい社糸乃
とりーーるれば。血をひ中てい神明へのあそれ。一命とたきく
べー。不美のとりよ親子れ縁是までるーで何地へも。疾
立されと敦園ひーく。引おとーく突とばせど。呆れ果くる
荒牧勇馬。清澄い身よ淫奔の。行状いせされども。不中ふる大
西が。娘とものとひーり。誤れ言ふけるく。父の慈恵むさ
じけるさと心れーらと察ーり。なーーぐるぐーーる諸手を
合せ。ふーー拝をて何処とそれと。當処ふりれど南とさーて。
馳さりりるどひいをる。清英い後りげ。まて目ふぐーーい

見とりて。茶屋の主人は偖言し。わづらふる茶料とのうえ
いぞ荒牧姓氏〳〵めと。打つまと立て天神の。〳〵ろ〳〵急
ぎやく。一筋道も恩愛と。忠義の道よりまよふ心れ間そ
あやふられ。話不在下且説。執権蛇塚典膳父子い。宮越
荒牧其外の。一味れ人と集會て。酒酌やう〳〵潜やう。
鎌田父子とまりぞくべき。謀計と相譚ふうち。荒牧勇
馬膝とさ〳〵やく言れや。某一ツれ謀あり。そち外ふび
殿れ重宝竜丸の名刀ふり。さぞふ先年偷をぐって。公乃
御手よりうちうけて。甫きび奴度殿ちり命へく

浴海介と。力とりる国へうへさん。忠直国ちり宝刀れ莒を
ふづきへかて〳〵〳〵。尊公こきとりて〳〵ちるいび。光定偽
物の鈍刀なうべし。是と越度は浴海介はい。截腹を申し
つけ。其連坐は偏屈ふる。老爺とおーうち隠居させ。人として
刺〳〵ふび。脇心れ病とのぞうん。奴伐いぞと傍貞はいへど。典
膳碪と手とうち。奴謀計きりて妙ふり。疾それるると行
ふべ〳〵。といてあづ〳〵殿の御教書あくてい渠も美引きび
く。国とりづる松浦佐用平。ものう〳〵宝刀とうれます。奴
美いうぞと期とおせび。鹿之進きて〳〵。そい最やんきるふ

まべて。祐筆よ言つけ。偽筆と昏せ[illegible]ふるぞ衆後一決しく。やがて祐筆鹿田毫勉と。よびて計策説示し御教書どうせて。淡海介と召よしく。妖怪とつげの御教昼と。淡海介よりとられば。計策とハまづ[illegible]。一矣[illegible]やがて領掌し。やしきへ還て父盛真。其故はと告るる。盛直いこまとときく。不審くおりへ。自筆ハ佐脇翰[illegible]へ。今さらる固辞んもなく。慌忙しく准備とて備前へこそい発足り。かくて淡海介忠直。駿馬ニ鞭と加へて。夜ニ日よつぎて馳しく。翌日夕ぐまよ。有根の

馳ぎて。播州と備前の境ふる。舟坂山よさしてふ。艮の方より黒雲棚引たちまち一天黒ぎてくく。[illegible]電光ひらめ雷さへ。おどろくしく鳴ぞつ。車油[illegible]大雨の。盆と傾くるごくふり出れば。馬さへ[illegible]高嘶しく。身ぶるいそで立ぶる。忠直[illegible]舎人ともつれぬ。一騎の旅。ふまべ。荷とるるとい[illegible]。合羽ぎれの持ぶ。さ一蓋菅笠ぶ。ぶのぐとすれど大うさあしぬ。夕立雨ニ着し麻衣ぴさしやぶ[illegible]水れ[illegible]ぶりまう。猶も雷電霹靂雨さへいく

鎌田間夜
密石を使ん
淡海之助

ふり〳〵きりゝ。腰よさしゝる挑燈も。灯さゝるゝゝ足もとの
隠石もうるゝねゝゝゝ夜ふれば。凡庸の人ゝゝ。一歩もゝゝ
ゝゝゝゝふ。忠直些も撓まじ。ゝゝゝゝふ鞭とくゝゝ。左
右ハ新緑炎〻と。生しげりる木下道。羊腸る九折と
右ハわく〻と左ハいそのゝゝ御教昏とぬゝさゝ物
と内ふゝゝろへ。おさめゝ猶もゝゝむゝゝるゝゝゝゝゝ山乃
半肢ハいゝきり。須臾ありゝゝ雨雲の。よゝゝるゝゝ白
雨のゝゝれゝくゝゝゝ夏ハ夜ハ。ゝゝゝゝれゝゝゝ十六夜の。
月ハ半天ハ磨き出ゝゝゝ。忠直ハ心ハゝゝゝ。大空と仰ぎ

ゝ。一息ゝと吹ぐ時ゝゝ。何ゝゝゝゝ乗ゝゝる馬。駭然と
ゝゝ例上ゝ。逡巡する光景ハ。忠直私ハおゝゝゝ。豫ゝ
ゝもゝゝ坎山ハ。年歴る老狼住ゝゝゝゝ。折ふゝ街巷ゝ
横行ゝ。道行人と取ゝゝゝふゝゝゝゝ夜ふけゝゝ坎山と。喻の
ふゝゝゝゝる。目今坎馬の駭きふゝゝゝゝ白狼乃
出来るゝゝゝ。何ふもせよゝゝゝゝ。日間どゝてハ役目
のゝゝゝゝ。馬進ぜぬ歩ゝゝ住んゝ。鞍よりひゝゝゝとび
下ゝゝゝ。磨づゝゝ諸手とりけゝゝまゝゝゝ曳りてゝくゝ。
颯と吹風れ出風の犬甚ふ身ハ滲て。何とゝゝさびゝゝ

うれば。猶も心とくゞり〳〵。右左と見めぐらいる。右の方なる重隙より。大なる一ツの狼。衝とうけ出る忠直目りけ。飛らんに勢威るり。忠直是と吃とうて。さてい狼ござんあるを。近づらば斬すてんと。佩刀の鯉口寛げて。疾視つめて猶すゝむ。斯て〳〵ふ狼いたをでふ間ぢのくようせるるり。身とおどゝせて其頂上と。向さまに飛こんと。こゝもあへば忠直。得たり〳〵刀抜晃り〳〵。丁ど切る腕の冴よ。何らそのりきたるべき。彼狼い脊中より。肢肚とのけて切付られ紙よりうれき脱け皮の。微く連るの。鮮血さゝ迸りて。

地上ゑ撲地と倒る処と。月の御影ゑすゝ〳〵て。搔撫おさへて止めれ刀指通〳〵ツ単衣れ裳まで刀れ血と。おゝぬぐひて馬引よせ。ふゝび騎て一鞭当足搔と急めてくれせ〳〵らば。其夜四更の頃わひゑ。密石ゑ着到〳〵。陣代松浦邸ゑいたり佐用平ゑ對面〳〵。命とつゝへ御手教と恭〳〵く遍与すふもん。佐用平い請とりて。忠直と慰労ひて。都の光景とゝゞよ問ひ。且狼の話話説ゑ及びて。猶何角相譚ふこゝち。友の夜れ明やとて。東れ空より曙をわて。夜をれのゞと曙られば。佐用平い忠直と。一室のうちゑ休息て。

諸士と集會て商量〳〵。宝刀の筥を取いぐ〳〵。埃をさら
ひ返書とよ〳〵〳〵。忠直は遍与〳〵れば。忠直佐用平は。埃
扱ち〳〵〳〵箱のふ〳〵。とり〳〵錦の嚢と離〳〵。宝刀は表を
ゆ〳〵〳〵〳〵。原のぞ〳〵くはおそゆ。坎夜い坎処は一宿〳〵。詰
旦赤明より馬とぶ〳〵て。其翌日未申は刻だろうは。京師は
こそいりへて着ぬ。時い文明元年夏六月十九日はるゆり
り

花月奇譚巻之四 終